

三瀬宗円の旅日記詠草

伊予大洲は、文化の頃に加藤泰周・常盤井守貫らが出て、和歌・国学を興して以来、その盛んな地として知られている。特に幕末は、常盤井巖戈・近田八束・矢野玄道・武田千穎・高橋田鶴子等、地方歌人に止まらない人も多い。その中で歌人としての存在すらが忘れ去られようとしている人に三瀬宗円がいる。子の三瀬諸淵が有名であるために、諸淵伝の中で諸淵の父として僅かに触れられる程度で、その経歴さえ十分に明かではない。三瀬家子孫に当たる彦之進氏の収集された資料、それを調査した「松山高商業学校商事調査会研究彙報・三瀬諸淵先生遺品文献目録」（昭和十二年十二月）にも、今回大洲市立図書館から発行された「三瀬諸淵先生文献目録」（昭和六十三年三月）にも、宗円の経歴に関する資料は含まれていない。

諸淵伝の先駆的業績である「愛媛先哲偉人叢書・三瀬諸淵伝」（長井音次郎著）には、家系図が載るほか、三瀬家が「大洲中町の麓屋」という藩の御用商人で塩問屋を営んでいたこと、宗円の父有儀も常盤井守貫に国学・和歌を学び、小沢芦庵の門人であったこと、早く父母を亡くした宗円も、近田八束に国学・和歌を学び、一人子の娘を失って旅に出たこ

となど、簡単な記述があるが、その細部の資料は示されていない。「愛媛先賢叢書・三瀬諸淵」（住吉悦治著）も前書を踏襲するのみで、新しい記述はない。つまるところは、宗円自身の資料としては、三瀬家の墓碑銘と宗円の書き残した和歌・紀行文に頼るほかはない。

三瀬家の墓地は大洲市西山根の大禪寺にある。一画を区切って三瀬家代々の墓が並んでいる。次に有儀・宗円の墓碑銘をあげる。

○有儀（前）（左側）麓屋半兵衛有儀行年五十

二 農蔭慧霖信女 辞 よそにみし世のはかなさも

世 遵叟有儀信士 世 我うへに降こそか、れ春の白雪

世 德雲妙暉信女 世 文化八年辛未閏二月念四日

世 先妻五郎村東千太夫俗名俊

世 享和三癸亥五月十七日卒廿六

世 後妻先妻姉也 俗名脇

世 文政六癸未正月十二日卒年五十

○宗円（前）（左側）麓屋半兵衛宗円行年五十

白方勝
（国文学研究室）

三 純道宗円居士
世 独峯玄妙大姉
世 天世宜法童女

辞 しつかなるいとなみによりこゝろよく
やすくうきよをわたりぬるかな

〔嘉永二年己酉歳五月十三日〕

(右側) 上須戒村二宮六弥女俗名くら

嘉永二己酉四月四日 行年四十三

同年娘 こと

文政十一戊子十月廿七日 行年五

猶、大禅寺の過去帳(新調)によると、宗円夫妻には、明治十二年十月にそれぞれ「真乘院」「瓊林院」の院号が追贈されている。

有儀・宗円の和歌資料は、前掲二つの「目録」に見える。現在、大洲市立図書館に所蔵されている。これを整理して掲げる。

1 ありよし集(題簽) 半紙本一冊 四十丁

有儀の歌集。真澄編。真澄の序文、宗円自筆の跋文がある。本文と序は真澄の筆であろう。表紙裏の貼紙には「有儀は小沢声庵の門人」とある。更に巻末にも次のような二枚の符箋がある。

①後に小沢声庵先生に学ひたり 半井梧庵先生ひなの手ふり八巻の内
大洲藩の巻に此の哥載せられたり 香取の神に詣出てと題

うな原やかきりもはても浪まくらかたしく袖に月やとりつ、
大禅寺の石碑に辞世左の如し 全忠院遵叟居士 文化八辛未年二月
二十四日五十才

よそにみし世のはかなさも我うへに降こそか、れ春の白雪

②辞世 真乘院純道宗円居士(号不半) 有儀翁男

しつかなるいとなみによりこゝろよくやすくうき世をわたりぬる
かな

〔筆者注〕「ひなのてふり」の歌は初編下巻雑所収。(同書は初二編四冊で、八巻ではない)詞書「まうてける時」

院号は明治になってからの追贈。(墓碑銘参照)

2 千草和歌(題簽) 半紙本一冊 四十丁

宗円の自撰自筆歌集、千首。宗円の跋文あり。他者の字で「天保六乙未極月本主予州大洲城下麓屋半兵衛」とある。天保六年は成立年か。

3 とりあつめくさ(墨書) 半紙本一冊 八丁

宗円の自撰自筆歌集。百余首を載せる。文字通り「千草和歌」に漏れた歌をとり集めたものであろう。表紙に「ふもとや 万兵衛 不半」と墨書。集中、父の廿五、母の三十三年忌の歌があるので、天保六年以後の編であろう。

4 旅日記詠草(墨書) 半紙本一冊 二十丁

宗円の長崎への紀行歌日記。表紙に「天保二年八月ヨリ十月マテ 旅日記詠草 大洲城下麓屋 万兵衛不半」とある。題名の上に「長崎旅日記」と墨書した紙片を貼付。

5 (天保七年旅日記詠草)(仮題) 半紙本二種二冊

宗円の上方・東国へ旅した自筆紀行歌日記。次の二本があるが、二本ともに表題が記されていない。A本巻末に西園寺源透氏の「長途の記 不半翁」と書いた符箋が挿入されている。また別の符箋に「同文二冊あり」として本紀行のあらましが紹介されている。

A本 表紙に牛、裏表紙に唐風の女人の色彩絵あり。三十七丁

B本 無地。薄青灰色。四十四丁

6 かへりさき(墨書) 半紙本一冊 本文三十三丁 跋半丁

宗円の京都への四度の自筆旅日記。表紙に「麓屋 半兵衛ふはん天保九年春夏旅行日記 同十年十一年冬二度 かへりさき」と墨書してある。猶その上に「天保九年十一年旅行日記 わかかへりさき」と墨書した紙片が貼付してある。中扇には各々「天保九年季旅日記」「天保十年旅行日記 なつのだひ」「天保十年冬のだひ」「天保十

年旅日記」と記してあるが、筆跡から見て明らかに西園寺源透氏のものである。この内、天保十年夏の旅は、西園寺氏の誤りで、表紙に天保九年春夏とあるのが正しい。四月に閏のあるは天保九年である。この年は三月四日に帰着して、はや廿日に旅立ったことになる。「此三とせはかりおのかゆきかよふ舟路ははや十かへりにもおよひぬれば」と文末に記しているので、商用もあつてかなり京都との間を往復したのであろうが、旅日記としてまとめられたのは、この四部である。

以上の資料から、宗田の経歴を略述する。三瀬家は、長井前掲著の家系図によると、源親房に出、喜多郡五郎村の三瀬四郎兵衛から分かれて、大洲中町に麓屋を開いた半兵衛宗悟が初代である。墓には「大真宗悟信士・艶室妙容信女」と妻と並べ書き、寛政五年癸丑十二月四日」と宗悟の歿年が記してある。宗田父の有儀は二代目で、歿年の文化八年から逆算すると、宝暦十二年（一七六二）の生まれとなる。常盤井守貫に師事したことは、1の付箋と眞澄の序文に「むかし有儀翁常盤井のうしのふかきをしえにこゝろをよせて」とある。守貫は国学・和歌に造詣が深く、大きな影響を与えた人で、その家集に「常盤井集」がある。ただ1の宗田自身の跋によれば「わか父の君もこの道に思ひよられしをや、よはひかたふきたるほとなれば心さしのふかきにあらて 只おもひいつるま、よみつゝりかきおかれたることのはのかすおほかるも」云々とあり、晩学でもあり、それだけに自由に歌を詠んだとある。父の歌に対する謙辞でもあるが、比較的率直に詠んだ歌が多い。適当に三首。

春ふかくなりけるかなをちこちの山も霞て見えわかぬまで
いつとなくとしつもればやぬはたまの我くろかみのしろく成らん
くりかへしかへらぬことをいつ迄か年月長くしたふなるらむ
宗田は三瀬家三代目を継いだ。嘉永二年（一八四九）五十歳で歿したの

で、逆算すると、寛政十二年（一八〇〇）の生まれとなる。右墓碑銘によると、母は先妻の俊で、享和三年、行年二十六歳で歿しているから、宗田四歳の時に当たる。父有儀の歿年時は十一歳である。これは後に自ら「おのれ四つといひしとしは、の君にわかれたれば其おもかけをたに見しらさりつるを。また十一になりぬるとし父をさへうしなひつる」（5）と言っている通りである。三瀬家は代々字を半兵衛と名乗っているが、宗田は始め「万兵衛」と名乗っていたようで、「とりあつめくさ」、「大洲歌あはせ」や過去帳にも「麓屋万兵衛不半」とある。「不半」がその号で、「宗田」は5の自跋に「ときは天保十三年といふとしのふみ月ばかりふもとや半兵衛よをのかれていまの名宗田といふ」とあるので、出家名、或は隠居名であろう。そのどちらであるかは確認できないが、その時期はこの跋を書いた天保十三年にごく近い年であろう。

幼くして両親を失った宗田は、父祖二代の富の上に無事業を継いだようである。長じて商いにいそしみ、妻を迎えた。妻の「くら」は諸淵頌徳碑文によれば「母は倉子二宮敬作の姉なり」とあり、長井前掲著等もこれに拠っているが、墓碑銘によれば「くら」は文化四年（一八〇七）の生まれ、敬作は文化元年生まれであるから「くら」は明かに妹であり、「愛媛子どものための伝記・三瀬諸淵」（大本毅著）「愛媛県百科大事典」では妹と訂正してある。両親追悼の歌が3にある。

父の身まかり給ひしを思へは早廿五年の昔となりぬるにそ
またさらにはたとせあまりいにしへをしたふも夢のこ、ちこそすれ
母の身まかりたまひしは三十三年になりぬるを しらぬ昔もゆかし
くおほえて

秋をたにまたてちりにしわか宿のは、その露にぬる、袖かな
天保六年が父の廿五回忌、母の三十回忌に当たる。長途の旅に出る前に法要を営んだのであろう。宗田は四歳で死別した母の面影は知らな

い。継母の脇（母の姉）にそれとなく面影を偲んだかもしれない。

宗円二十五歳の時、女子「こと」が生まれたが、五歳の時に亡くなった。「とりあつめくさ」に追悼歌がある。

娘の身まかりける折に

露けしな後のかたみととりこの手折残せししら菊の花

娘を亡くし、うき世のはかなさが身にしみて商いにも身が入らなかつたようであるが、三年後の天保二年には長崎へ出かけている。この時は旅立ちに当たっては後の商売のことを心配したり、旅の途中でも「おのか家のわたらひの品いさ、かかひもとめ」たり、米の売買をしたり、長崎見物もししており、まだ心慰む余裕があつたようである。

四・五年の頃、有儀と後妻脇との間に生まれた弟半助の娘加代を養女に貰い、更に東宇和郡鳥鹿野村庄屋宇都宮九左衛門三男幸七（宗綱）を加代の養子に迎え、家業を譲る。それも憂き世の業を逃れるためであつたのであろうか。それから四国を巡り、七年には妻と隣の女子を伴い東国への長途の旅となる。諸書には神仏に一子の誕生を祈るための旅ともあるが、そうした記述は見当たらない。また観光や商いの目的も否定できないであろうが、宗円自身は「た、ほとけ神おかみたてまつるはかりと思ひたちぬる」旅であつたと記している。「かへりさき」では次のように回想している。

世わたるいとなみこそいとなみてもく猶いとなきわさなれと
のれいとけなかりし時ち、は、の君にもおくれ またとしを経てひ
とりこをさへ先た、せて弥物うくなりゆきて よろつにわかみひと
つをうきものに思ひなして 住なれしさとをもちて、雲はなれ遠き
国々にとおもひ立ぬ

長途の旅の帰宅後は足を痛め、重病を患い、三年ばかり引きこもつていたが、友に励まされ、再び商いの道に立ち返ろうとしたのは天保九年

のことで、その旅日記に「かへりさき」と題したのも、その意が込められていよう。十年には男子が生まれる。

おなしつこもりのよけしきありてをさなきさへ生いてきたれりこ
は神無月朔日ねのひとつばかり也き さてもよはひかたふきて後い
てきたることなれはにやいとともくかよはけなれと さすかに見す
つることもかたくて何くれと心そへつ、七八日はかりして初声なと
もす

やつと命を取り留め、弁次郎と名付けられたその子が、後の諸淵である。諸淵は幕末から維新にかけて活躍した蘭学者として、また日本で初めて電信に成功した人として知られている。

宗円も元氣をとり戻したようで、「としころのかれ見はやとさへ思ひわひたりしうきよのいとなみにたち帰り ほと遠き舟ちをも□□初つるよりいまにおこたらず とし毎に都にかよひなれきくはや三とせはかりに成ぬ」と商用であろう、京都の間を往復するようになる。しかしその巻末には次のように記す。

此三とせはかりおのかゆきかよふ舟路ははや十かへりにもあよひぬ
れと ひとたひも波風なくあやうきめ見ずして行かひしつる事こそ
なけれ か、るうきめみるもみなわれからのことなれば このたひ
をかきりにてと なにはの事と、もおもひと、まりぬるこ、ろにな
りにたるも よしやあしや

天保十一年までの三年間に十往復するほどの身の入れようであるが、一度も平穩な旅はなかったとして、これも打ち切っているが、早く両親を先立て、娘を失い、世の営みを厭う気持ち底流しているのを汲みとることができよう。よしやあしやとためらいながらも、宗円はこのあたりで世の営みを捨て、隠居したのではなからうか。それ以後旅日記の整理につとめたようであるが、それ以外の消息はわからない。

嘉永二年四月に妻の「くら」が亡くなると、続いて宗円も五月十三日に歿した。辞世の歌（前掲）には、決して幸せな生涯とは言えなかったにしても、晩年にはそれなりに平安に生きた心が詠まれている。

宗円の和歌の経歴は明かではないが、最初の歌の師は「孝見翁」であったことが「とりあつめくさ」に見える。

おのれいとけなきよりいとまなくして 敷しまの道には
思ひもよらざりしを 孝見翁す、めみちひかれたりしかは またなきことのはの友にて月雪花をももるともにのみなかくみつるを

商いの素漠とした思いを慰めるものとして、和歌に親しんだことがわかる。天保二年の長崎行への「旅日記詠草」でも「孝見ぬしのかたへおくれるもおなし品なり」と真澄へと同じ筆墨硯を贈っている。まだこの時点では近田八束は登場しない。宗円が本格的に歌を習い始めた時になつたから登場するのが本居大平と近田八束であろう。これについて「天保七年旅日記詠草」自序の冒頭に次のようにある。

藤垣内翁のおなしゆかりのかけをしたひて はやくより近田大人の
もとにこと、ひきて ことのは林分そめたりしそのとしはさてのみ
暮て（以下略・天保七年となる）

必ずしも分명한文ではないが、八束・宗円ともに藤垣内（大平）の門人であり、その縁で宗円は八束の門を叩いたと解され、その年は天保六年であったことになる。大平入門の時期は明らかでないが、「とりあつめくさ」にある大平追悼歌を見ると、師事したのはそう長い年月でないように思われる。恐らく数年のことであろう。

逢見しこともあざざりし紀州の本居大人のうせ給ひし秋の哀傷といふ
ふ題にて

立帰る波路もかなや秋風の音にのみ聞かぬ歌のうらら

大平の歿したのは天保四年である。これを契機に宗円は八束に近づき、師事したのではないか。「千草和歌」の序に次のようにある。

このひとまきよ ちかきとし藤かけの大人になつきおくりてかの
かけにたちよりそめしより あさかやまのあさき心にみつから千首
のうたをとて ことしけきよのいとま／＼にのみいてたるそのなか
に かのおきなふてくはへられたるもあれと おほかたはいとも
つたなきことのはのみなれは（以下略）

文中の「藤かけの大人」が八束である。藤垣内（大平）に師事したことによる呼称であろう。その家集をも「藤蔭集」と言う（大洲文化叢書「近田永潔八束冬載歌文集」所収）。天保六年以後、宗円は八束に師事し、歌の添削も受けたのである。八束は宗円に十五歳の年長で、当時、大洲・八幡浜のみならず伊予歌壇の大御所と認められていた人である。「千草和歌」は八束に師事して、暫く後の成立とみた方がよい。「とりあつめくさ」にも次のようにある。

近田大人のえらみ集てか、せおかれたる藤の花ふさてふ哥ふみをか
りてかへすに

はやくより花のゆかりをしたひきてかけふまざりしことそくやしき
「藤の花ふさ」の成立年等は不詳であるが、借りたという本は現存本の上巻に当たるとであろう（前掲「歌文集」参照）。八束とその門人の和歌集である。右の歌には、早くその門に加わっていなかつたこと、加わっていたら、本集に自分の歌も載つたであろうにとの思いが汲みとれよう。八束に添削を受け、七年の旅の首途に際してもまず八束に歌を贈り、八束判者の「大洲歌あはせ」に出詠していのをみると、身近によき師のいることを喜び、傾倒しているさまが窺える。

猶、5に跋を寄せた者の内、「なかの、広信」は「大洲歌あはせ」に「中野清助広信」と見えるが、詳細は不詳。常嶋は城辺の神官で、本

居大平・内遠の門人。嘉永四年歿、五十歳。鹿鳴草園・松園らは不詳。

その他、宗円の周辺の人としては「とりあつめくさ」に菊川静庵・声月翁・堂雨（藤右衛門）・兵頭主・大塚清風の名が見える。静庵は天保二年「旅日記詠草」でも宗円が長崎から帰って土産を贈り、歌の贈答をしている。常盤井守貫の教え子で、この春（年不詳）六十歳でみまかつたとある。清風は「藤の花ふさ」上巻に二十四首、下巻に九首が載り、「大洲歌あはせ」のメンバーである。「国文学献集成」（近藤信著）に前田夏蔭の清風宛書簡が載っている。「大塚林左衛門」とある。声月翁は歌の指導をよくしたとあるが、それ以上は不明である。堂雨・兵頭主も不明である。また「ありよし集」を編した真澄は詳細は不明であるが、長崎への旅に際しては「常にしたしみあへるおのか友真澄主に」相談し、後事を託している。

此真澄は十年余りも足た、すして おのつから世のことわきの事し
けからず されと其心さまよはしくもあらねは おのか出行跡
の事ともをは此人にとてもものしおきたり
「とりあつめくさ」に真澄の追悼歌がある。

ますみのあかせは廿年あまり足た、すてなやみきつれと 心さまの
よはしくもあらねは 常に歌よみ文よみなどしてまたなきこと
のはの友と思ひつるを けふは早世になき人の数になんりたりけ
る 頃はきさらきはしめなりければ

とひなれしことはの花のこのかみにおくれてひとりのこるかなしき
冒頭の「あかせ」は「吾兄」であろうか。歌にも「このかみ」とある。
宗円に兄のあったことは聞かないし、前には「友」とあった。いずれに
せよ、宗円より年長者であろう。真澄の歿年は不明であるが、ここでは
足を病んで「廿年」とあるので、前の天保二年からほぼ十年後とみてよ
いであらう。

有儀・宗円の和歌資料はそれでもかなりな量になる。そのすべてを紹介することは困難なので、ここでは〔天保七年旅日記詠草〕のみにとどめる。この旅日記が七か月、三千里にも及ぶ長期の旅で、記述の量も多く、当時の旅のありさまをもよく窺うことができるからである。その文芸的意義については『愛媛文学手鏡』を参照されたい。

次にこの旅日記のA・B二本を比較してみよう。

A || ア自序、イ本文、ウ跋1（八束）、エ跋2（なかの、広信）、

オ跋3（鹿鳴草園）

B || イ、ア、ウ、オ、エ、カ跋4（松園）、

キ跋5（をか原の常鳴）

形態的にみると、序・跋の順序が変わっているほか、B本ではカキの跋二つが付け加えられている。ア・ウが天保十三年、エが同十四年であるのに対して、キが弘化二年であるところから、B本の方が後の形態といふことができるであろう。内容的には、B本の三月廿一・二日の長文の記事がA本にないが、これも後から書き加えたものとみてよい。その他、叙述の端々に違いはあるが、大差はない。つまりA本を第一次、B本を最終稿と見てよいが、他者の跋文だけはB本から書き写してA本に添えたものである。特に近田八束の筆跡はB本のものが自筆と認められる。以上により本稿の紹介にはB本を用いた。

本旅日記の翻刻に当っては原文の通りとした。ただし、本文は殆どが平仮名書きで、濁点、句読点もないので、読み易くするために、句読点に当る箇所は「一字あけ」とした。

本稿作成に当っては、資料調査、翻刻を許可された大洲市立図書館、大禅寺、また参考にした「大洲市誌」「大洲市碑録」等にも、併せて御礼申し上げます。

天保七年旅日記詠草（仮題）

天保七とせきさらきはかり 末遠き旅ちにおもひたちぬるを 道のこと
も何くれとと、ひよる近田おきなのもとにとて

君をおきてたちわかれないかはかりふみ迷はまじことのはの道

十二日のあした宿をたちいつ 雨ふれり

ふるさとを帰りみしつ、行袖にかゝるは春の雨かなみたか

十三日中山のさとをすくるほど 空ははれわたれり

晴そむる後もぬれゆくたもとかな猶ふる郷の空をなかめて

十四日道後の宿にきつきたり

旅衣きなれし宿のゆふ露もかゝりそひぬる草枕かな

十五日朝またきにこの宿をたちいつ

たひの宿たちいて、ゆく袖に又あしたの露のかゝらすもかな

猶ゆく空のかせ寒く雪の山ちまちかくなりて

まかひつる梢は雪になりはて、いよ／＼寒しいよの山風

十六日昼の頃やう／＼中山といふ所の峠にいたるに 跡よりおひつき、

たりし松山の人と行先のこと、もかたらひ逢つ、丸亀よりは海をも諸

共になどいひつ、ゆく ほともなくや、歩みおくれぬ

松山の人にはおくれゆく末のおほつかなみそ袖にかゝれる

十七日西条の大まちといふ所にて 久しうとたえしつる人に逢て昔か

たりなとしつ、さてゆく／＼

いにしへをかたりあひつ、道ゆけは旅とはさらに思はざりけり

十八日こそその夏も尋こし中村といふ所の加藤大人の許にやとる

こそもとひとしもとひて草枕かりそめならず思ふ宿かな

十九日さぬきの国金比羅のみやしろにまうてたり

海山をこえきて猶も行末をいのるにかひのなからまじやは

ゆふつかた丸亀の湊なる室津の舟に乗て夜をあかす

かち枕ひとりうきねの袖の露かゝるもわひし沖つしら波

廿日も風こゝろにまかせねはおなしとまりなり

おひ風をまつは久しないそくとは思はぬ旅の舟ちなからも

廿一日もおなしけしき也とてたゆたひるたりしをゆふつかた此舟をたつ

ねきて われらかいのちはかりをたすけたまへとてふしまろひいりぬる

をみれば 十八九はたちはかりなるむすめ三人さしもしやしけならぬさ

まなからあかつきやふれたるひとへの衣にてふるひ／＼わな、きつ、ゐ

たり あほしのうら何かしといへるもの、こなり 思ひよらぬ旅ちにし

まよひきつ、にけはしれるものともなり 跡より人の追きたらぬ先にい

かにもしてかの浦へこきわたしたまはれとてなきしつみつ、物をたにい

いはす ひと／＼いかなる事にかと思ひぬたり 扱雲の行かひ風のけし

きもおもふさまならねと舟出してゆくほど なみ風いといたう立さわき

てかみなり霰ふりてすさまじともおそろしともいはんかたなし

鳴かみの音は雲に轟て霰たはしる苦やかたかな

猶も波かせたちまされば さてもいかなるうきめをかみるらんとはか

り思ひわひるたりしを やう／＼しの、めの空ひかり見えゆくころい

さ、か風もふきたゆみぬれば みな人々もよみかへりぬるこ、ちす

廿二日海つらいよ／＼おたやかになりぬ されはかの三人のむすめとも

のみのうへにありしことかたりを聞 ざるは備前の国人とかいひて足な

へのす行者車にのりてこ、かしこのかにとたちよりては物こひなとしつ、

あまたのくに／＼をめぐり／＼て此あほしの浦にきたりてひと／＼のや

みふしるたるをみては こうほう大しの御をしへなりとてくすりをあたへな

としていさ、かの病おこたりぬるもおほかりとそ おのれもちかきころ

まてみ、も聞えずめ見えず物をたにえいさはざりしを四国八十八所のみ

ほとけをおかみめぐりぬるより いつしか心ちもさはやきていまはた、

あしのわつらひはかりになりぬ たれ人にまれ光明真言をとなへしん
 〳おこたらすはいかなるくるしみもまぬかれぬへしとをしへみちひく
 を つたへきくひと〳みな尊かりて 己はまことの弘法大師 わかとも
 もからのくるしみをたすけんためにいてき給へるならめといひつたへ
 き、つたへて 終にはこの足なへの事をいまだし〳とそよひあへりけ
 る されはこの三人の娘とも、みの病わひしきま、にかのをしへにした
 かひたりしかは いさ、かこ、ちよけなるをみていよ〳四国をもめく
 りはてんほとならばやまひは跡もなくなりなんなど、 かのいまだしに
 いひまよはされて さらは三人ともにもなひ行給はれとて其こ、ろま
 うけしたりしを このさとの司よりひとをまとはすゑせもの しはらく
 も此所にはとあれは 三人の親とも、 されはこそとて このむすめら
 の門出をはと、めたれ さるを三人はそのよさりおのか家々を忍ひいて
 、かのいまだしのくるま引などしつ、 まつ備前の国に行て あるにも
 あらぬうきめみつ、いたつらに日を送り もてこしこかねともはみなう
 しなひはて、後 やう〳さぬきの国うたつといふ所まで渡りつきて
 またこ、に廿日はかりもあそひくらしぬるほと娘とものみにつけりたり
 し物をはみなかてしろになしつくして 扱けふは足なへ只ひとり金比羅
 のまちに行て かのもの、こともなりとてむすめどもの其あたひをさた
 めて三所の家にうり渡しぬとそ 三人はあとにてなつみ水くみなどしつ、
 るたりしを この小家のとなりなるひと一人けさ金比羅のみやしろにま
 うて、帰るさ かのまちにていまだしのむすめをうりてこかねとりあつ
 めるたりし有さまなどみる〳かへりきてた、ちにまつ三人のものをお
 のか家によひて いかなれはみたりともにその身をうりてあとに残れる
 あしなへのおやひとりはいか、なりゆくへきなどいひて そのことのも
 と末をとひあきらめんとす むすめともはもとよりおもひもよらぬこと
 なれはうちおとろきつ、 扱かの足なへはわれらの親にはあらず しか

〳のよしありてこ、まてつきそひきたりしものなるを さてはいかに
 してかか、るわざはひをはまぬかれなましとてかなしみあへるをみて
 あはれとや思ひけん かのとなりの人いさ、かのあしなとあたへて跡は
 とまれかくまれまつ丸亀まではしり行て舟たにあらは乗てかへるへし
 とく〳などをしへられきてかく此舟には乗たりとそ よく〳みれば
 めかすみ かひなしひれたみ むねくるしきなど三人ともに病の品こ
 そかはれさはかりのことにもあらずかし 海つら猶もしつかになりゆくほ
 と乗あひぬる人々くち〳にかの足なへのこと、もをくり返し〳とひき
 く ことに其おかしさえたへすしては舟のうちゆすりみちて笑ひあへり
 後には此娘ともあたまをいまだし〳とそ舟のうちのこどくさとは
 なりぬ かくてほともなく室津もちかよりぬとてひと〳はいさみよろ
 こひあへるに三人は又もなきいりぬれば 人々たちよりていかにとたつ
 ね聞は かくまでやつれぬるすかたをおや〳にみせんもおもてふせな
 れは此海にやみをもなけましなといひ出たりしを とかくなくさめなどし
 て舟人ひとりつきそひてかのあほしへは送りかへす 扱室津に舟はして
 たるは日くれば後なれはこよひは此浦にやとりをもとめたり
 ふる郷の空はいつくとしら雲の経たて、遠く成きさりつ、
 廿三日室津をたち書写山の禁にきてよをあかすに雨ふれり
 つれ〳とふる郷ひとの恋しくて春のなかめそそてぬらすなる
 廿四日道にてともなひなれきつる人にわかとて
 ふるさとをいて、二たひなれきつる其ひとにさへたちわかれつ、
 廿五日ゆふつかたありまの宿につく いと賑はし
 昔よりこ、にいてゆのあれはこそありまの宿は賑ひにけれ
 廿六日つ、みか瀧のもとにたちよる
 よそこにこそ行や過まし津の国のつ、みの瀧の音せさりせは
 廿七日丹波の国のさ、山のあたりにて雨ふりいてたり

笹山の露分まとひゆく袖にかゝるは春の雨はかりかは
廿八日大坂にいつ 殊に賑しければ雨ふれと物にまきれて

さひしとも思はてふるは津の国の難波の春のなかも也けり
廿九日朝なきに舟のゆきかひしけきをみて

百ちふねいて入しけきつゝの国のはのうらの春のあけほの
卅日大坂をたちいて、ゆくほどゆふつかたより又も雨ふりいつ

草まくらゆふ露しけき袖にまたこよひもはるの雨そふりそふ
三月朔日あらし山ちかきわたりにやとれるに猶も雨ふる

あらし山梢の花もいかならんかめわひしき春の夕くれ
二日雨はれてのち来てみれば花のさかりなるよしなれば

過にきと聞しもちらてさき匂ふはなの都の春は賑し
花見にとてひと／＼のゆきかひしけきをみて

手折ゆく袖さへはなの都路はた、枝なからちると見えつゝ、
三日おなし宿なり けふひと日雨ふりくらせり

をしと思ふかひもあらしの山さくらそれたにあるを雨もこそふれ
四日空はれたり けふも猶おなし宿にて

花を思ふ人のこゝろのくま、てもけふははれゆく春雨の空
五日はまた雨ふれとならのかたへとていてゆく

都ちの花のさかりを見すて行袖にをやまぬ春の雨かな
六日も猶空は晴す 在原寺なる井のものす、きしけれるを

いくよかのふり分かみのおもかけに筒井の水のかけなひきつゝ、
七日初瀬寺にまうてみれば今に梅の花さかりなれば

かけしそのことはの花の色もかもそひていくよかふる郷の梅
八日道よりともなひたりしひとにわかるとて

うとからす思はぬたにも旅ころも立わかれなはわひしからまし
此ほとめくりあひぬるふるさとの友をもけふは見うしなひたり

ゆくりなくめくりあひみしほともなくけふはた人に別れぬる哉
九日はみやま路に分りて日くれたりければ

わかれにしかたをゆかしみ見帰れはかすみか、れり遠の山本
十日いはてといふところにやとる 夕くれ空ゆく雁をみて

春雨にぬれ／＼いてしふるさとのこと、はましを帰るかりかね
十一日猶山ふかく行ほど道もなき所／＼おほかる中にも 人／＼の歩み

なやめる四十八所の河瀬／＼たに 近き頃より橋をかけて行来を安から
せんと思ひたちぬる心さし浅からすこそ そは上村といふ処也き

四十余りやせゆくほとの旅人になきけのはしもかゝる嬉しき
十二日和歌の浦の道をとひ行に聞たかへつゝ、あらぬかたに迷ひきて

しほひみちとひゆく浦のかたをなみかゝる所も聞まとひつゝ、
十三日山ちにて雨にあふ さて熊の、かたへ行道二すちなれば 大へち

をや中へちよりやと思ひまとひるたる折しも 津の国より同じ道くる人
二人おひつき来て中へちより諸共に行みんといふにまかせてゆく ほと

なく岩しろといふ海辺にいてきて日くれたれば ころにてよをあかす
朝もよしきちの遠山見わたせははてこそなけれおきつしら波

十四日道成寺にまうてたりければ 此寺にてそのかみおんなこのおそろ
しきすかたと成しふること、もきゝて こそかたを思ひつゝ、く

たをやめのひたひのつゝの、跡かたもあらぬむかしの物かたりかな
十五日また山ふかく行ほどたけひらのさし桜といふを見て

うゑしその昔をとほにももの、ふの其名も高き山の桜に
猶ゆき／＼てゆのみねにきつきたるは日くる、ほと也けり

ふるさとを思ひいてゆの峰の雲かゝる袖にも露みたれつゝ、
十六日小くちといふ所に宿る けふは此ほとしたしみ逢ぬる旅人に別れ

たり
へたてなくとひとはれこしその人の今宵の宿よいつこなるらん

十七日ゆふつかたなちの瀧のもとに立よりきたれり

聞しにもまさりていと、よに高きなちのみやまの瀧の音かな

十八日はまのみやといふ所にきててこ、によをあかす

ふる郷の夢はいくたひみくまの、浜のまつかせおとろかしけん

十九日新宮にまうてつるゆふざりまた雨ふりいてたり

草まくらゆふへの雨はいかにせんさらても露のかゝるたもとを

廿日名高き山／＼をもことなく越きておわしといふ所にやとれり

越こしをけさも夢かとみくまの、山ちの高き名にそおとろく

廿一日とある浜辺にいてきてかりねす よもすから風さわかしければ

聞なれし山まつ風のうきに又たちまさりぬる波の音かな

廿一日いせの国なる浜辺にてこよひもよを明しかねたり

折敷し此はま萩にふく風も又ふるさとの夢さましつ、

廿三日いす、河のほとりにいてきたれる頃ほの／＼とよは明わたれり

いす、河清き流はなかれての行末のよの末もにこらし

今朝の雨晴て後 太神宮内外の宮／＼残らずふしをかみ奉る

かけ高き神路の山をいつる日はくもりなきよの光とそみる

廿四日二見のうらにてしの、めの空しらみわたれり

いつる日のかすむ匂ひも玉くしけふたみの浦の明てこそみれ

廿五日上野といふ所に宿るに あるし何くれと心さし深きこといはんか

たなし

旅といへはた、うき物と聞こしにたかふこよひのやとにも有かな

廿六日四日市といふ所よりをはりの国に舟にてわたる

いせの海や波ちはるかにうら／＼とたなひきわたる春霞かな

舟はしてあつたの宮にまうてたりしははや日くる、ほとなりけり 此

みやの宿にはこよひさつまといよの国の守の殿とまり給ふとてやとこと

に賑しく おのかやとりつる家にもその御とものひと／＼あまたとまり

あひて よもすからさわかしかりき

廿七日また明やらぬほとよりのひと／＼のたちさわきいてたるにおと

ろかされて 此宿をいて、ゆくほと名古屋の町にいたる 処も広くゆる

やかにて賑ひもた、ならすみゆ さて町にて日くる、ほとならはなやは

しのさし物やといふを尋よかしとかねてより人／＼のいひをしへつるま

に／＼とひきてみれば 年久しくすみあれてまつしけなる家のちいさき

にはにすて あるしはなきけ深く人の旅ちに行かれたるにはかならずやと

りをこひもとめてものしける人なりとそ おのれも此あるしにいさなは

れきてやとれり さて此家なるひと／＼も其心さまかはることなく情ふ

かきこといふはかりなし

聞こしに露たかはすて心さへなこやの人に逢見つるかな

廿八日此宿のあるしと何くれの物かたりなとしゐたるうち 下つけの国

日光山のみゆきはう月中の七日なればけふより山越の近き道をゆくほと

ならば其ころにも逢給ひなん こはよにまれなるかみわさなれば早とく

思ひたちたまへかしとす、められて た、ちに其心まうけしつ、此やと

をたちいつ

旅ころもけさ立わかれ行袖にとまらぬ物は泪也けり

廿九日うつ、といふ所にやとりて夢もむすはすすからいさとし

草まくらむすひもはてぬ夢そうきけにもうつ、の宿と思へは

四月朔日猶ゆく／＼山ちにまとひくらせり

立かへんあざ衣たにもちあへぬ旅の空にも夏はきにけり

二日みの、くに、て山ちのさくらをみる

夏きてもみの、山ちにふる雪はあらしのさそふ桜也けり

三日雨ふる 山ちに日くれたりければ風いよ／＼寒し

み山ちは霰ましりの雨にまたこよひも花の雪そふりそふ

四日も猶はれま見えすしてきのふのことし

はる／＼ときその山みちふみ分て行空寒く雨そふりくる
空はれて後きてみれば花はまたちりはす

夏も猶雪ふみわけてきそ山のおく深くこそ花も匂へれ
こまかたけには猶雪しろくつもれり

しなのなるこまかたけには夏かけて猶ふるとしの雪も消せず
五日下のすはの三社の前にやとる 此御神とし／＼卯月寅の日みゆきな
るを けふよりの賑ひいはんかたなし さるに此いてゆのもとことに人
のいていりしけ、れは

千はやふるかみの恵もしなのなるすはのいてゆに汲しられつ、
六日上のすはのみ社にまうてまたもとのやとりに帰りに遊ぶ

まれにこしけふそみゆきの空晴で月こそ氷れすはの海水
七日此国人をともしなひて猶ゆく先のこと、もとふ

道しらてまとはましかはかくはかり心ゆくへきたひちならぬを
和田峠にてふる郷の友にあふ こは兵頭式部といへる人なり

夏山の雪ふみ分てきみにけふあひみんものとおもひかけきや
八日善光寺にまうて、御堂の前におき明す よもすから賑しき事いはん
かたなし

あふちさく花のうてなにくよかも猶か、るらんむらさきの雲
九日をはすて山のあたりにかりねす

旅こ、ろなくさめかてらさらしなやはすて山の月をめてつ、
十日あさま山近きあたりに宿る 風はけしくてけふりも見えす

よそめには立し烟のあさま山夕いる雲そ消て跡なき
十一日このやとをいて、ゆく／＼

夏かけて猶消やらぬ雪まよりあさまの山にけふり立みゆ
十二日上野の国こちのはら道にゆきくれたり

かみつけのこちの原みち分まとい猶行袖に露こほれつ、

十三日山ちにまとひゆくほともなく雨さへふりいてたり

旅ころも野山分こし露もまたほしあへぬ袖にかゝる雨かな

猶もゆく空はれやらす ゆふさりいかほのゆのあたりにきつきてやとれり
かみつけのいかほのいてゆいて入も絶まなくこそ賑ひにけれ

十四日も猶うき雲はれやらす

み山ちはうの花くたしふりはへて鳴かひもなきほと、きすかな
十五日雨はれたり けふも猶山ちをゆく／＼

都にはまた珍らしきほと、す聞かひもなき山のおくかな

十六日はまたも雨ふるに道もなき山ちの木のね若かをとつたひのほりて
中禅寺にまうつ 此山中に水うみありて むかしより小魚たにすますと
そ この水のなかれをつたひ下りてうらみの瀧のもとにいつ 日くれた
れと清たきといへる所までたとりきてやとるに空はれたり

底きよみ魚たにすまぬ海水のなかれす、しき月のかけかな

十七日朝とくおきいて、日光山の御社にまうつ けふみゆき也とて人の
行かひいとまなく賑ひまたいはんかたなし けにや此みやしろはよにな
らひなき見所おほかるよし聞つれと 人たちしけ、は只珍らしと見る／＼
めをおとろかしつるのみなれと其あらましたに筆には書つくしえす

岩戸出しそのかみのよの天つ日の光もかくやか、やきぬらん

くもりなきみよそとあふきみるたひにいと、てる日の光そひつ、
十八日雨ふる道にてともなひけるをはりの人のなさけをうけたり

浅からぬ恵の露にけふはまたかゝるたもとのぬれまさりつ、

十九日あまた、ひ山ちをふみたかへきてまとひくらせり

たつぬへき人なきかたにまとひこしこの旅ちこそ心ほせけれ
廿日下つけの国いつる山にまうつ 此御寺のかたはらより五町はかり灯
をともしつれてのほりゆく いはやのおくにはみほとけの数かきりもな
くおはしましたつ、なかる、水はいかなる夏の照日にも絶る事なしとか

聞て

わきいつる岩やの水はなかれての其末のよもたえしとそ思ふ
大ひらのみやしろにもまうてたり

ちとせをやかけていのらん大ひらの山松かえのときはかきはに
廿一日ゆふつかたなすの、原といふ所にたとりきてかりねす

露深きなすの、原のかり枕夢をはさらに結はさりけり

廿二日黒羽村にてやとれる家の主とよのふることもかたらひあかす

おいらくの昔かたりに夏のよの有明の月そかけしらみゆく

廿三日情ふかき人のもとにやとりをもとめたり

草枕かりそめなから浅からぬ恵のみこそ露忘れね

廿四日道もなき山ちにふみまとひて やうくやみそといふ処の山寺に
尋いたりしは日くれて後なればこゝにて夜をあかす

まとはすは此山てらにいりあひのかねを嬉しと聞はたとらし

廿五日雨ふりくらす さても猶ゆくくいく帰りも時鳥を聞

いそきこし旅ちさへこそいそかれねふりはへて鳴雨のゆふくれ

猶晴やらねはひたちの国下の宮村にやとれり 此家のひとくみな情ふ
かし

廿六日くもりみ晴み空のけしきさためなし こよひもおなし宿なり

はれくもりけふもいくたひふるみのよかさよとはかりたちさわきけん

廿七日山ちをゆくく時鳥をきくにうくひすもなきふれは

時しらぬみ山のおくもうくひすとなくねあらそふほと、きすかな

すみあれたる家にやとりであるしのこゝろありけなるを

露をのみやとせる草のいほりにもすます心や有明の月

廿八日雨ふれり ゆふ暮のやとにてひとりこしかたをおもふ

しつかなるゆふへの雨にふりいて、なく声しけき時鳥かな

廿九日わか国なる松尾村へふみと、けてよと人のものしければ

玉つさに露おきそへつもていなんほと遠くのみ思ひやられて

卅日も猶ゆくくふるさとのこと、もをおもひつ、く

う月こそけふはかりなれゆく末はかきしられぬ旅ちと思へは

五月朔日中里村といふ所にやとれり またも雨ふる

ふる郷を思ひかへせはさみたれの雲そ袖にもか、り初ぬる

二日鳥羽村といふ所にやとれり 此家のあるしなさけふかき人なり

旅ちゆく人をめくみの露もよにしけきつくはの山かけのいほ

三日つくは山にのほりきてのち ほともなく雨はれわたれり

つくは山みねのしら雲分のほる袖には露もはらひかねつ、

たかねにしはしやすらひるたるほと時鳥の声しきりにきこゆ

友もかなわはたひにして思ふことしけきつくはの山時鳥

四日はひくれたのちまでもこゝ、かしこあゆみなやめり

門ことのあすのあやめにひきかへて旅ちのやとをかりまとひつ、

五日明かたに雨ふる 空晴てゆくほと土浦の里人たひ人とのいひあら

そふを見聞ほとはやわかみのうへにもとあやうければ

なみやわかみにかゝるとてつちうらを帰りみもせて立そいてぬる

六日下つふさの国なめ河にまうつ 雨ふれ、は此みてらにてよをあかす

ぬれつ、も猶たとりきてなめ河のふかきめくみをたのみぬるかな

七日香とりのみやしろにまうてたり

たち花のかとりの宮のみしめ縄いくよかけてかかをりそふらん

八日ひたちの国鹿鳴大神のみ社にまうつ

尊しな深き恵のなみくこにゆるかしまのかみの宮るは

かなめ石のもとにたちよりみる

ゆるきなきみよのためしと思ふにもおもきかしまのかなめ石かな

九日萩原村といへる所の小寺に只ひとりすめる翁あり こゝにやとりを

こひもとめたり けふは此里みな神まつりのいはひ日なりとて餅酒さか

な、ととり／＼思ひ／＼にもちはこひきたれる 其人／＼もこ、に遊
ひくらす 宿のあるしの情ふかくもてなざる、にそのれも酔ふしてこ
よひ雨風のはけしかりつるをもうつ、とはおもひしらざりき

旅の空うき雲霧のか、るよもわかこ、ろこそ晴そめにけれ
十日も猶はれまみえねはおなし宿なり あるしのおきなななさけふかき
ことはきのふにもまされり

いのるかな五月の雨の八重雲をいく日もか、る宿にか、れと
十一日空はれて後宿の翁かちを取て舟こき出し下つふさの国へわたる
道のほと二里はかりなり その心さしは此とね河の水底よりもふかくの
みなんおほゆる かくて名残を、しみつ、もたとりゆくほととある海辺
において、日くれぬれはこ、によをあかす

海原やかきりもはてもなみ枕かたしく袖に月やとりとりつ、
十二日またも雨ふる 下つふさの国てうしの浦辺にきてよをあかす
か、らてもぬれ／＼きぬる旅ころもいかにせよとて雨のふるらむ
十三日も猶はれす かみつふさの国笠森にまうて、此みてらにやとれり
たひ衣ぬれ／＼きつ、笠もりのかけたのみ、る雨のゆふくれ
十四日くる、まてこ、かしこやとりをもとむるにかひなし あふちの花
さけるみてらをと此里人にをしへられ来て夜をはあかせり

あふちさく軒はにか、るむらさきの雲そ今宵のしとね也ける
十五日下の郷といふ所にきてやとれり 空は又も晴くもりす
かりねするほともなつの、草まくら夢もさたかにむすひかねつ、
十六日やさしの浦といへる浜辺にやとれり よもすから雨ふる

もの、ふのやさしの浦によるはまた波立さわく雨のおとかな
十七日も空晴れす されとこ、は九十九里の浜とてよにも名たかき所な
れは 浦人のあひきするを見にゆく さて日くれたれはおなし宿也
あひきすとあこと、のふるあまの声それもくもれり五月雨の空

十八日石安寺といふみてらにてみ法の声を聞うちひとのなさけをうく
逢かたきみのりの声をきく袖に恵の露もか、る嬉しさ
十九日かつ浦なるす原や何かしのもとにやとれり 人みな情深し 猶も
雨ふる

立よりてかつうら人の浅からぬめくみのなみもそてにかけつ、
廿日猶も空はれす 沖津といふ浜辺にきてよをあかす

風わたる沖つのはまのうら波にまたか、りそふさみたれの雲
廿一日あはの国小みなにて日くれたり 猶も雨ふれり

五月雨の雲たちそひてこみなとのうらさわかしき夏の夕暮
廿二日猶雨風はけしければ此うち浦にやとる 家のひと／＼けふは猶情
深し

浅からぬ人の心のうち浦のなみ／＼ならず嬉しかりけり
廿三日空はれたり 明かたに清すみ山にのほる

有明の月のひかりは清すみ山もとしろくさえまさりつ、
廿四日風の心ちにあゆみわつらひて ひるはかりよりゑみ村といふ所の
福原何かしといふ人の許にやすみぬれと 猶心ちよからねは此家にやと
れり

雨をのみいとひし物をいつかまたわか身に風のしみとほりけん
廿五日こ、ちさはやきて昼はかりより此宿をたちいつ

ふくはらの庵にて風をふせかすは露のいのちは消へかりしを
廿六日夜にいりて後やう／＼柴村といふ所にやとりをもとめたり

たとりきて後もしは／＼柴むらにしはの庵をもちりまどひつ、
廿七日正木村といへる所にやとれり こよひもまた例の雨ふる

ふるさとを思ふ心もさみたれの雲とひとつにみたれそひつ、
廿八日あはの国日本寺に宿れり こ、をは人／＼五百らかんとのみよひ
なせり けにや此み山の石もてつくりたてたるみほそけの数かきりしら

れす また此山のふもとなるを大ほとけとなふるをまうてみれば 誠に人のちからをもつくしいとなますして おのつからなるみほとけの姿也き

岩山を生れなからのみほとけとひきてあふきみるも尊し

廿九日鹿子崎村金胎寺といふみてらにやとりてほと、きすを聞

けふのみをおのかきつきと時鳥なく声高し岡の松はら

六月朔日高倉村といふ所にやとれり こよひの雨風ことに寒ければ

富士のねは雪かもふらんふる雨も冬けしきなるみな月の空

二日も猶はれす 原道をゆく／＼日くれて白つか村といふ所にやとる

露しけき袖にも雨のか、るかな草の原道わけまとひつ、

三日高しな村にやとれり こよひ空晴て風いよ／＼寒し

天の川かせえ／＼てゆふ月のかけこそ氷れ水無月のそら

四日成田山にまうつ 日暮て此あたりの家にやとれり 寒さ猶きのふのことし

夕風は寒く成田の山てらに夏も秋なるかねのおとして

五日は雨の晴間も見えず あれはてたる山寺にいさなはれきてよを明す

夏の上の雨さへ寒くふるてらにおき明しぬる袖の露かな

六日もやますふりくらしたる野道にまたもふみまよひたり

袖の露はらひもあへすむさし野の草の原道わけまよひつ、

七日江戸なるしるへの人のもとにきつきたり こはおのれを親としきたりて住る人也

むさし野や此ひとものゆかりよりたつねいりぬるけふにも有かな

八日かのしるへの人と共に浅草寺にまうつ 此辺にしはしの宿をこひえたり

浅草のかりそめならぬにきはひに此大江戸のさかえをそおもふ

九日空晴たり しはの増上寺にまうつ 日くれて後やとりにかへる

水無月の空も心のうき雲もはれてす、しき月のかけかな

十日またも雨ふれり

いかなれはきさらきやよひう月よりみな月かけて晴ますくなき

十一日もきのふのことし けふふるさとへとてふみをかく

ことのはの友よりほかの人までもけふもゆかしく思ひいてつ、

十二日遊ひにいて歩行て亀井天満宮にまうつ

いくよろつよ、とかかけていのらましかめるの底の深きめくみを

十三日宿のあるしにいさなはれて日くる、頃よりよし原にきたり

さそはる、花の色かもよし原とわれもうきよの風にまかせん

十四日雨ふらす 神まつり也とてけふよりの賑ひめをもみ、をもおとろかせり

よそほひをみせてくるまもまち／＼の人心をそと、ろかしゆく

十五日あさの雨はれてみゆきことに賑し

水無月のなかはくもると見し空のはれて賑ふけふにも有哉

こよひまたも雨ふりてふきくる風ことに寒し

富士のねにこよひふるてふしら雪もさそひきつへき風の音かな

十六日江戸を立んといひけれといかてと人のいふにまかせてと、まりぬ

旅衣きつ、もなれてふるさとへ帰るさいそく心ちこそせね

十七日日本はしの辺にてさかの釈尊開帳なるにまうてたり

尊しなはてしなき野の末までもか、るみのりの露の恵は

十八日暁の頃雨風ことにはけしければ

明かたのまとうつ音にふる郷の夢ちをさそふ雨とこそきけ

十九日はれまに深河なる八幡宮にまうて、帰るさまたも雨ふれり

ふか河のなかれす、しみふる雨のめくみさへこそか、りそひぬれ

廿日江戸を立ていてゆくにかのしるへの人ひとりはねきしといふところ

まで跡より見おくりきて名残を、しみつ、とある家にたちいりて酒くみ

かはしぬる ほともなく日くれたれば此人をは帰してこゝにやとれり

またこそといふはかりなる別路に先たつものはなみた也けり

廿一日ひうらといふ所にやとれるに 江戸のかた猶なつかしくおもひや
らる

音にのみ聞し昔はあつまちをしたふこゝろもかゝらざりしを

廿二日も猶ゆく／＼おもひやることきのふのことし

むさし野をしたひみる／＼ゆく袖の露もそけふははてなかりける

廿三日野中の庵にやとれり あまた、ひくみな鳴こゑす

ふる郷にかよふ夢ちのみしかよを又もくゐなのおとろかしつゝ、

廿四日ち、ふの山ちをゆくほどゆふたちにあふ

ち、ふ山こえんと思ふ夕くれの雨さへ袖をぬらしそへつゝ、

廿五日晴たりし空のゆふつかたよりくもりきて雨ふりいてたり

珍らしくてる日にかはくほともなくまたもぬれ行たひ衣かな

廿六日も猶はれま見えねは三つ峰へものほりえす

かきくらし猶ふる雨にみつのみねのほりもあへす袖ぬらしつゝ、

廿七日ち、ふの山ちをゆく そらは猶きのふのことし

かひかねもくもり渡れる夕たちに上にこりするち、ふ山川

廿八日空はれて後から竹村といふ所にゆきくれてよをあかせり

なか、らぬ夏のよたにもふしうきはから竹むらのかりね也けり

廿九日も猶雨ふれり けふもまたしらぬ山ちにゆきくれたり

みそきせて旅の山ちにまとふみのうきをいかなるせにかなかさん

七月朔日おなし山路をゆく 空は猶きのふのことし

旅の空うくもきのふのけしきにはかはらぬけさの雨風のおと

二日も猶はれすふるに江の鳴のかたをとひゆくほど こなたへとてみち

ひかれゆく 道のほと一里はかりきて此人の家にたち入てやすむ さて
もてこし物ともはこゝにおきていてゆきみるに 此しま海原の沖にはな

れるたるさま此よならず またなみたてる家／＼の賑ひまでもみなあら
ぬ世界のこゝちして いかにともいはんかたなし

江のしまのえならぬけふのなかめには又ふる郷の友そこひしき

猶見所もおほかれと雨風おやみなければ かの物あつけおきたりし家に

かへりきたるはまた巳の時はかりなれとはや昼の心まうけしつゝ、まちゐ

たり こゝにて物くひ酒のみなとしてやすらひみたるほど 空も晴わた

りぬれば江の鳴のかたをはかへりみる／＼此所を立いてゆく ほともなく

鶴かをかなる八幡宮にまうつ 此み社に御宝物など開帳するをもをかみ

たてまつれり

すみそめし源きよくにこりなき末のよかけていのらざらめや

此あたりにはいにしへの跡とて其名高き所／＼もおほかれと とくくれ

はてぬれば杉本といふみ寺のあたりにやとれり 風こと(ひやかをり)にさむし

草まくらかりねの袖におきあまる露や秋たつしるしなるらん

三日江戸のかた近き所にてきたりしかと帰るさ心せかれて

又こそといひしはたひのそらことになしつゝ、いそく道にもあるかな

四日はまたも山ちをゆくに空はれやらすして日くれたり

かきくらし雨もこそふればこね山あけは越んとおもふよすから

五日も猶はれす 田中村金子何某の許にやとる あるし情あるひとなり

足からや霧の八重山こす道をとひゆく袖に雨はふりつゝ、

六日猶はれま見えす おなし宿なり あるしのなさけ深さはきのふにまさる

うちはしもなかれおちゆく山河に猶ふる雨のはれまたになき

山川にけふもせかれてせくかひもなき旅ちこそ猶いそかるれ

七日珍らしく空はれたり されとけふもおなし宿なり

たひ衣袖のみぬれて秋は来ぬたなはたつめにかるやともかな

八日田中村を立て一の沢なる山寺にまうて、こゝに宿れり 又も雨ふる
くみてもしられざりけり山水にすます心の底のふかさは

うて、しはしやすらひつ、此所にてよもやまの物かたりなどするに
宵の宿のあるしもこ、なる人／＼も其情ふかきこといふばかりなし
ほかるならひなれはとて 猶行先の道のしるへこま／＼ともものにかきし
るしあたへられたるそ けに嬉しきひとの心さしなりける か、りぬる
ほと日くれたりければ此家をこよひの宿とす

まとふへき旅の野山の道しるへふみ、ることに心ゆかまし

此宿の主は齋藤新平とかいへる人にてなきけふかく物書ふみよむ道にも
くからさりけらしとて 思ひやられてゆく／＼も猶跡したはし

十日道もなき山ちをこゆ こはかの齋藤大人のをしへにしたかひこし所也

柴ひとのかよはぬかたと思ふにもこ、ろほそさのそふ山ちかな

十一日又も雨ふる ゆふさり鳥坂村といへるところにとまりぬ

草まくらゆふへの露はおきあまる袖にも雨のか、るわひしき

十二日富士のすそ野なるよし田といふ所の町にやとりをもとめたるは日
くれて後なり

きてはまたはらひそかぬるたひ衣ふしのすそ野の秋のゆふつゆ

十三日空はれ風なれば宵よりと、のへおきたる餅いひ綿入のたくひを
は人にもたせ 朝とくいて、道をいそぎつ、此山にのほりきて

見おろせはち、ふかひかねこまかたけ雪に照日の光そひつ、

日くれて山の八合といふ所に夜を明すに 其寒さた、ならず けにや五
合めより上は世のほかにて草木竹の類ひたに生た、ねは た、ちいさき
石をひろひよせつみかさねてふ、きをふせくはかりなる穴のやうなる家
のうちなれば ともなひきつる人／＼もひとつ所によりあつまりて残り
すくなきたき木折くへ火をたく／＼も物をたにえいはずして かたみに
只こ、へひそまりみつ、夜をあくるをまつ

よのほかと聞こしよりもふく音の高ねおろしにおとろかれつ、
十四日すはしりといふ道を下りきて山のなかななる小みただけのみ社にま

九日大つか村といふ所にいて、とある家にたちよりてやすみたるを
宿のあるしいてきたりてとかくかたらふほと しらぬ道にはまよひもお

住ひとの心のおくのゆかしさもまた此やまのたくひやはある

十五日よし田を立て行ほとこ高き山をこえて藤の木村につく

なきたまのまつりたにせてうき旅の野道山みちまとひくらしつ

十六日かひの国なる善光寺にまうて、此みてらによをあかす

しなのなるみたの光をうつしきてあふけるかひの国さかえつ、

十七日下円る村といへる所にきたりて宿る 夕立し風さわかし

越てこしかひかねおろしいく度かおとろかしけんふるさとの夢

十八日金沢といふ所に宿りをもとむ けさより道をもいさなひきてした

しみ逢ぬるほうしあり 此人唐大和の文ともの道にいそしかりけらし

此宿なるひと／＼墨すり紙とりいてきつれば 書て人／＼に物しつ、お

のれもえたりつれと 明るあしたおきいて見ればかの品も其ほうしもい

つちゆきけん跡かたなくなりはてぬるそいと名残をしかりける

ひとこともとはてわかれし法のしの跡のみひとりしたふかひなさ

十九日宵より雨ふりて水おと高き山川のはしをこゆ

かけ橋をはやせの波の底に見てぬれつ、わたるけふのあやうさ

廿日とのしま村を立てともなひこし人のをしへつる家を尋きてやとれり

浅からぬ宿の恵をおもふにもしたはれまさるけさの道つれ

廿一日きそ山なる大たいらといふ所にやとれり 雨風ことに寒し

たひ衣きその山みちたとりこしゆふへの雨とかせのはけしき

廿二日猶晴間見えす 日くれて後中つ川といふ所にやとりをもとめたり

橋よりもあやうかりしは雨風に下くつれするきその山道

廿三日みの、国たにくみ寺まうて、此御堂のきによをあかせり

尋きてみの、国なる谷くみのふるき恵はくみてしれとか

廿四日せきかはらにて日くれたりければ此ところにかりねす

矢さけひの音せしよにはひきかへて虫のね高し原のゆふくれ

廿五日明かたにふ破の関をはこえたり

あれまさるふ破のせきやのいたまより露はもりきて月やとしけり

日暮て野原の庵に宿るにくひ物の類ひよろつこ、ろにまかせず

かれいひもまたぬ旅ちの宿にけふかしく物たになしとこそきけ

廿六日あふみの国多ち河にきて見れば　きのふにはにす殊に賑敷宿にと
まる

うきめみしけさの夢ちもたとられて渡り嬉しき越川の橋

廿七日宿を立いてゆくに湖近きわたりは水にせかれてなみたてる　家
くまてたとりつくへき道たになし

海ならぬ里のさ、波けふいく日越きて袖にか、りそふらん

廿八日かの道をは舟に乗渡りきて長命寺にまうてて此あたりにやとれり

袖ぬれてうゑけんを田も水越て底のもくつとみたれあひつ、

廿九日多賀のみ社にまうつ　いのちかみといふ五文字を句ことにおきて

いやつきに残るも久しち早ふる神のまもらす道のをしへは

卅日鳥もとの宿をたちいて、ほともなくあふさかの関ちをすく

ひとすちにいそく心もけふはまたすきの下道行なつみつ、

八月朔日早崎といふ所につく　こ、へもかの道をは舟にのり渡りきたれ

り　此あたりの家くはみなことしの五月頃より水あふれいてきて　よ

わたるわたに心にまかせずとて　今もゆかよりうえになみたてり　さ

れはゆかのうへにゆかをかきて住るするなりけり

ちりか、るなみの花のみ早さきのうら風寒し秋のゆふ暮

二日出羽の国の人と諸共にちくふしまへわたる　波風さわきたてり

小舟にもりの恵のなみか、るひ、きは高し竹生しま山

ゆふつかたわかさちなる里にいてきてやとりをもとめたり

おい人もむかしに帰るわかさちときくにつけてもゆくこ、ろかな

三日はまたくひもの、たくひなき宿にとまりてよをあかしたり

こよひもやかしく物たになきやとのかりねよ扱もいかにしてまし

四日丹波の国河田村といふ所につく　宿のあるし情深し　くひ物ともし
からす

けさよりの心あてこそたかひぬれ恵もふかき河田むらにて

五日ゆら河といふ川を渡りて此あたりに宿る　よもすから雨ふりあかす
よた、ふる音を聞にも嬉しくそ宵に河をは渡りこしぬる

六日ゆらのみなとより小ふねにのりてはしたてにわたる

海士をふねゆらの湊のおひ風にはしたてかけてわたるけふかな

七日たしまの国大内村にやとる　小家なれとあるしの心さまいやしから
すみゆ

とちこもるむくらの宿の月かけも秋の光はさしもかくれす

八日いく野はいつこにやととひゆくに　此あたりの野辺也と人のをしゆ

かへるさをいそく心に大江山いく野の道も遠からぬかな

九日はりまの国しかまの浦にて舟のたよりをもとむるにかひなし

沖つ波よるはしかまのうら寒く吹くやははりまのなたの塩風

十日室津より舟にのる　雨風はけしければ此みなどにうきねしたり

なみか、るそてにもよるはむら雨の雫おちそふ苦やかたかな

十一日雨のはれまにとてともつなをとく

くもりこし空も心もめつらしくはれて見えゆく浦のまつ原

十二日ひるの頃丸亀に舟はてす　例の雨ふれり

雨風もふるさとさしてかへるさをいそく道にはさはらざりけり

猶はれやらねはしはしとて立よりぬる家にやとる　金比羅のみ社近し

晴ゆくをまつまとはかり思ひしにたかふも嬉しやとのめくみは

十三日此宿のあるしの翁と旅ちのなか物かたりして樂しみくらぜり
とひとはれかたりくらししてをやみなき雨にもうさをはらしぬるかな

十四日昼の頃空はれて八幡の神のみゆきにあふ けふはことに賑し

ふりつ、くあめの八重雲か、らすはけふのみゆきにあはて過まし

十五日此宿を立いつ 足いたうなやめり やう／＼辻村といふ所に帰りて宿れり

心のみた、先たちてゆきなやむ旅の長ちはせんかたもなし

こよひめつらしく空はれわたれり

名に高くすめるこよひの月見てはまた思ひやるふるさとの空

十六日も猶足のなやみつよけなれば馬をかりもとめたり

いさみゆく心こそせねあらこまにのりても足のなやみある身は

十七日中村といふ所の加藤札太といへる人のもとに帰りつきたり こは

もとよりくすしの道にいそしき人なれば こよひこのなやみを見す

たとりきてなやめる足のふみ所わするはかりそけふは嬉しき

十八日かのなやみにくすりをこひえていゆるをまつ けふも猶雨ふれり

ふるさとの空まで思ひひてられてなかめわひしき秋のゆふくれ

十九日なやみすこしをこたりて此宿をいつ あまた、ひ山川をわたれり

けふはまたいくたひ／＼の山川を袖ぬらしつ、わたりきぬらん

廿日朝とくいてたちて中山といふ所をこゆ 猶も足なやみいてたり

有明の月にさそはれゆく／＼も又こえなつむたひの山みち

廿一日やう／＼日くれてのち道後の宿にかへりつきたり

いよのゆのもとより人になれきつる宿そとてこそ立もよりけれ

廿二日猶あしなやめり おなしやとにあり

なやみこし足にはいと、くすりゆもしるしすくなき心ちのみして

廿三日猶おなし宿にてきのふのことし

くすりゆのしるし見えねはいたつらにふる郷をのみしたひくらしつ

廿四日道後の宿をたちてかへりくるにかのあしいたうなやみいてたり

ふるさとのちかよるま、にわひしさもまさるは足のなやみ也けり

やう／＼中山の里まで帰りきておのかやとものことなととひきく

かはることなしと聞ては又さらにしたはれそすることのはの友

廿五日中山の宿をたちてゆふつかたやとりにかへる

わけいてし ころも経て

春のかすみに かへるたもとの

秋のゆふ霧

かくかりそめならぬ旅ちに思ひたちぬるも おのれ四つといひしとし

は、の君にわかれたれは其おもかけをたに見しらざりつるを また十一

になりぬるとし父の君をさへうしなひつれば もとより家まつしく只う

きみのいとなみに何くれの物ともうりかふ世のわたらひにのみとし経ぬ

るほと いつしかをんなこひとりいてきぬるを このよのひかりにおも

ひつるを いつ、といひしとし先た、せつれば いと、うきよのはかな

さもみにしみとほりて 三とせよとせはかりいにしへはらからの家より

とりこして ちかきほど家のなりゆつりおきつ 今は方にうしろ安くて

このたひのあらましに思ひたちそめて こその夏はかり大洲の里をたちて四

国のほとめくりはてつるを またさらにおもひおこしつるなりけり こ

たみはとしころなれきつるめをいさなひまた西となりなるをんなこそ

もともなひて た、ほとけ神おかみたてまつるはかりと思ひたちぬれば

かねてこ、ろさしつるかたへもえ物さらりつれと いさ、か道のゆくて

にて つかみしかき筆にかいしるしおけること、も いかに入わらへな

ることにかとてなむ

ふ は ん

藤垣内翁のおなしゆかりのかけをしたひてはやくより近田大人のもとに

こと、ひきて ことはの林分そめたりしそのとしはさてのみ暮て あら

たまのとしもたちかへり空もうら、にかすみのころもきさらきのはしめ
つかたたひのみちにおもひたちて おなしとしのなか月ばかり家には帰
りたりき そは天保七年といひしとしになむその道すからなやみわたり
し足のやまひもやう／＼おこたりぬれと またのとしはやまひのさまも
かはりてはしめのほとは風のこ、ちになやみそめて はて／＼はいか、
なりぬらんしらすなりにけり 跡にてきけはそのよはのあらしにさそは
れてつひにむなしくなんなりはてぬるを いかなるかみのめくみにかあ
りけん ほともなくよみかへりきたりぬれと 猶みとせもよとせも有し
心にはたちもかへらさりしを このほとこのわたりなる若きひと／＼か
のしけきはやしにわけいりて友とすへきもおほかれは 思ひいて、あり
し道ゆきふりとりいて見れば いともつたなきことのはのみなれと そ
の折みしところ／＼有し名残をたに思ひいつるみちのしるへにもとて
かくひとまきにかいあらためつるになん ときは天保十三年といふとし
のふみ月はかり ふもとや半兵衛不半よをのかれていまの名

宗田といふ

この不半といふひと折／＼おのか許に言かよはせなとするひと あさな
を半兵衛といふ 天保七とせといひし年の二月はかり旅に思ひ立て お
なしとしの長月はかり家にかへりきつる 其みちすからの事いさ、かか
きて 日ことによみいてたる哥なりとそ さるはめつらしき山のた、す
まひ水のなかれもた、にみ過したりせは 後瀬の山の後思ひいつへき事
なく はな紅葉のゆふへあけほのも いかほのぬまのいかにみるかひあ
らざらましと思ふにも 又なく心とまりてなむ こちたく数おほかる哥
なれば 見むひとの心にはなとかくはと思ふもあるへけれど 中々にと
り捨なとしたらむは 哥ぬしの心にあらざらましと た、にさておきて
なむ 天保十三年七月廿八日かくひとくたり事そへたるは 近田やつか

旅路の日記てふものは紀貫之ぬし菅原孝標ぬしの女君四条の尼君などの
日記を始めとして 今もむかしをしのふ日記少からず 其のちの人々の
紀行も扶桑拾葉集などにあまたありて見もてゆけは心ゆくものになん
されと人遣の道などにては行路のつかれ何くれにて書しるすこともものう
く 折にふれてよみし哥／＼も記さぬを 此不半ぬしはみつから思ひ起
してかく遠き国々を行めくり いそかぬ道にても其所々にて日毎に哥よ
みものせられしいたつきいよいかたきことになん有ける これに言そ
へよとあるを はやく近田ぬし中野ぬしなど其こと書加へられぬれば
数ならぬ身にていかてかと思ひたゆたひてしはし打おきしか 印南野、
いなひてか、さらんも此ぬしのこ、ろならしとて かくひかことかき記
しつるは 鹿鳴草園のあるし白物人なりけり

不半のぬしさきのとしの春 処はなれ遠き国までゆき、し、と聞そ 此
比か、るものこそいてきにけれ いかてこのはしめに思ひよれらんこと
かきそへてよとあるを なにかとてとり見たれば その旅のみちの記に
なむありける さて一わたりうちよむにこの日記のさまよ 詞をそきて
いとを、しくいひ出せるさまなか／＼のこりゆかしきこ、ちのするかな
されは言の葉のみちもこのことくとをくわけ行てこそ たくめるもをた
しきもめてたきふしは出くるものにはあなれと 此一巻はいみしうこ、
ろにしみぬ されとたらはぬくちさきにはむはかたはらいたきことに
しあれば 何とかのはへむ さし出すへき手もおほえず とかうまされ
もてゆくにいとをしうて いさ、かこれをのみ筆とりてをりふしとむら
ひかてらかへし贈ること、はなしぬ

天保といふとしはしまりて十あまり四かへりの春きさらきのはつにを
きのふといひて また風さむきあしたの窓にうめと、もに此巻をひら

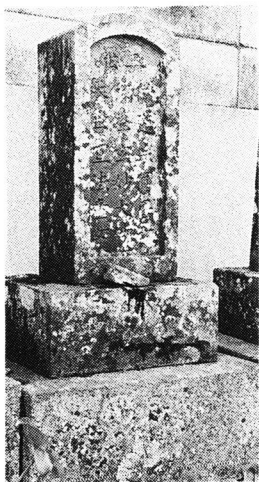
きて なかの、広信しるす

うみやまの名たゝるところをゆきめぐりみまくほしきよしは思ふとち常にいふことなれと しけいとのしけきうきふしにまつはれて さすかにけふともえ思ひたゝざるを かく遠きさかひのくまゝまで残りなくふしの高根何かしのやまなど 大かたはあま雲のよそに見すくす所にさへわけのほりて なにくれと書あつめ給ふことよ されはこのことの葉草のかすゝわけゆくほとに ともに行みるこゝちして こよなくをかきまゝに おのれも筆をとりにてかきそふるものになむ かくいふは松園のあるし

不半といへる人の旅路の日記とて 或人のもてきたるを天の橋立一わたりわたりて見るに 紀の海いせの海大えやまふたら山富士の高根にさへのほりて わたらぬ海わけぬ野山もなく かり寝のありしやうそのをりゝの歌とも、しけ原のいとしけく なにやくれやとつはらかに嶋のはねかきかきと、めたるは 明番の浦浪なみならぬしわきにて 若芦のよわく筆とるさへ物うく思ふおのれらか露はかりもおよふへきことかはさて此しりへにおのかひと言をもそへよと 重浪のしくゝに乞はるゝにつきて やかて思ふところのあらましをくたり二くたり埋火によりてはひと、もにかきちらし とかくいふは弘化の二とせといふとしのしはす五日の日 をか原の常鷗

(平成三年四月二十五日受理)

初校終了後、大洲市立博物館に、宗円の短冊・書簡が所蔵されていることを知ったが、その紹介は次回にしたい。



宗円墓（大禪寺）



天保七年旅日記詠草
八束跋・宗円跋

長崎旅日記
わか帰りさき 表紙